

大阪秋期特別集会（第2回）

生命の泉

――ヨハネ伝第4章3～14節――

1978年11月4日

小池辰雄

生命の泉 キリストは地水火風 清水 デンマークの兵隊 サマリヤの女となってキリストに水を戴く 患難を通じて天国に キリストは究極の無者

【ヨハネ4】

³ ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。⁴ サマリヤを経ざるを得ず。⁵ サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、⁶ 此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。⁷ サマリヤの或女、^{あるおんな} 水を汲まんとて来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。⁸ 弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。⁹ サマリヤの女いう『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。¹⁰ イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物を知り、また『我に飲ませよ』という者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与えしものを』¹¹ 女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深し、その活ける水は何処より得しぞ。¹² 汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』¹³ イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴ 然れど我があたる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

●生命の泉

「¹⁴ 然れど我があたる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。」
という。「水」が出てくる箇所を少し引用してみましよう。エレミヤ記2章11節、

「¹¹ その神を神にあらざる者に易たる国ありや然るに我民はその栄を益なき物にかえたり。」

「益なき物」というのは偶像です。神を神にあらざる者に替えてしまう国がたくさんあるわけです。ところが、我が民はその栄えを、神の栄光を偶像にかえてしまった。



12 天よこの事を驚け

「天よ」といつて天に呼びかけている。預言者は天に呼びかけたり、地に呼びかけたり、

「天よ聴け、地よ耳を傾けよ」

なんてイザヤが言っています。

慄^{おのの}けいたく怖^{おそ}れよと

畳みかけて三回言っています。

エホバいたもう¹³ 蓋^{そは}わが民はふたつの悪事をなせり 即ち活ける水の源なる

我^{みづからみずため}をすて自己水溜^{みづからみずため}を掘れり すなわち壊^{こわ}れたる水溜^{みづからみずため}にして 水を有^もたざる者な

り (エレミヤ2・12、13)

「活ける水の源なる我」と、こういう言い方をしている。この句は、キリストがぐつと捉^{つか}まえてヨハネ伝で言われた言葉だと思います。

「エホバ」という言葉を私は古い聖書で読みましたけれども、私は「エホバ」という言葉が好きだから使います。今はヘブライ語では「ヤーヴェー」という、学問的にはそういうことですが、しかし、「アドナイ」「わが主」という言葉と、それから「ヤーヴェー」「実存者、実在者」という、この二つの言葉を兼ねて、母音と子音をこつちやにして読んだのが「エホバ」という読み方ですから、むしろ、

「主にして実存者なる者」

そういう意味を、「エホバ」という間違った読み方に含んでいると思って、私は逆に今度は「エホバ」と言い出した。何もエホバというのは、イスラエルの神さまに限ったことでない。イスラエルに顕われた神さまは、イスラエルの民族神として顕われましたけれども、これは全世界の神としてキリストが捉^{つか}んだわけです。現実というものは、特殊なものを通して永遠なるものが現われる。

イエスという人物を通して永遠の存在者、神が現われている。神は何処にあるかというと、ナザレのイエスに現われた。みんな特殊を通して天的なものが現われ、永遠的なものが現われるのが本当の特殊なんです。特殊、それつきりではしょうがない。有限なるものにおいて無限なるものが現われ、我々がやはり有限なる存在を通して無限なるものを現わす実証者とならなければならないわけです。

人間の生命には、空気と水、この二つが非常に大事です。身体的大部分は水でしょ、水というのは生命に不可欠なもの、そういった生命の元になるところの「水」、それが「気」になるわけです。水が滾^{こん}々と流れてやまず、湧き出づる水が即ち泉というわけです。しかも、活ける活水、活泉^{こんせん}だという。その源なるものは神。そしてエレミヤに自らを現わした言葉は、

「それを捨てて、自分でもって水溜^{みづからみずため}を掘ったって、そんなものは腐ってしまうぞ」

と。この電灯は、電源が切れてしまったら、みんな消えてしまう。電源と常につながっているから、こうやって光っている。みんな源とのつながりが切れたらダメなんです。だから、



源泉ということは非常に大事なものです。我々の在り方も、そういう意味で、神さまは、「そういった源泉なる私を捨てて、とんでもないはなしだ」と。これはエレミヤに言われた言葉です。

●キリストは地水火風

それから詩篇の42篇1節、

「ああ神よ鹿の溪水たにがわをしたい喘ぐあえがごとくわが靈魂たましひもなんじをしたいあえぐなり」(詩篇42・1)

我々の魂は渴いています。何に渴いているかというところ、ちょうど谷川の水をしたい喘ぐ鹿のように、自分の魂もあなたを慕う。ところが、人間は魂の渴きを人間の作ったものでもって、いろんな文化文明でもって満たしているような顔をしている。代用をやっているわけだけれども、本当は魂の渴きはそれで満たされていない。

「もう私は死んでも大丈夫です、キリストの生命は凄いものです」

といったようなことを、文化文明の中にいて本当に言える人があるなら見せてくれと言いたいくらいだ。それくらい自覚していない一番大事なところに、実は魂の渴きがあった。それは魂の渴きを癒してくれる源との関係が切れてしまった。源とのつながりが切れて、

「またつながり返せ」

というのが、「宗教」という言葉なんです。「レリギオ」というのは「結び返し、再結」という、再び水の源泉に結びつくということです。その活ける神を、

「²わがたましひは渴けるごとくに神をしたう活神いけるかみをぞしたう何れいずのときに

か我ゆきて神のみまえにいでん」(詩篇42・2)

切々たる祈りの言葉です。ユダヤ人は本当に神さまを慕う。ただ彼らは砂漠の民だから、非常に泉、清泉というものが、井戸になる泉というものが大事で、ヨハネ伝のヤコブの井戸を発見したら死にもぐるいで争うような場面もあるわけです。そういう魂の渴きです。頭のかわきでも、単なる心の渴きでもない。魂の渴き、これを癒してくれるものが源泉。その源泉に具体的になって下さっているのがキリストという源泉です。キリストという活ける、また活かすところの泉です。だから、さきほど読みました、

「我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし」と言う。

「そんな水をどこから持って来ましたか」

というわけだ、サマリヤの女は。そういう会話が非常にドラマティックに展開している。

「活ける水というのは聖霊のことだよ」

と、7章のところに書いてある。「活けるパン」だとか、

「自分は活きたパンだ」



とか、「活きた石」だとか、「活きた水」だとか。「活きている」とか、「活かす」とか言うね。我々に、

「死んでも死なない生命を与える」
ところのものです。

キリストのおとずれは悟りではない。教えるでもない。具体的に生命を与えるもの、そういう水です。「水」という字をちよつと変えると「火」という字になる。聖霊はヨハネ伝では4章のところに、水にたとえられ、ルカ伝12章では火にたとえられ、使徒行伝1章、2章のところでは火である。

「この火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん」とか、

「天から火の如きもの降り来て、各々の頭の上に留まった」

なんていう。火と言われたり、水と言われたりする。どっちも我々の生活に非常に大事なものです。地水火風という。風が気です。これが霊であり、水も火も風も、みんなこれは聖霊に通ずる。これを「四大」という。水と火と風がみんな聖霊のたとえになっている。我々に地水火風がどれだけ大事か。大地は母なるもの、生命を生み出すものを持っている。す。一切を荷っているところのもの。四大を我々は瞑想するだけで、キリストの世界に入る。キリストは火でもあり、水でもあり、風でもあり、地でもある。そういうことを思うわけです。魂がある時は烈火の如く、火の如くなる。大体、生命力を持って進んでいくような人は火にたとえられるような場合が多いですね。

「ベートーヴェンは火の性格を持っている」

なんて言われている。

●清水と温泉

我々の見るところの水にも二つある。生命の渇きを癒すところの、冷たい水としてのもの――日本人なら知ってなければならぬ――温泉がある。清水と温泉。温泉は熱泉といってもいい。それでおいしい詩がある。

「自然の母の乳房より、そこに流るる泉あり

たとえば花の乙女児の、やがてやさしき母となり

その嬰兒のくちびるを、潤す様に似たるかな。

一つは澄みて冷やかに、谷の間にほとばしり

葉を重ねたる青草の、繁みのうちを流れている。

一つは泉あたたかに、その井戸暗く濁り出で

響きは神の鳴る如く、巖の陰に溢れている。

幸は暑さに疲れ涯て、渴き悲しむ人にあれ。



ああ木の陰の草深く、澄める泉を飲み干して

自然のうちに湧き出づる、清き生命を汲ましめよ。

幸は希望^{のぞみ}の薄くして、思い悩める人にあれ。

ああ夕風の来たる時、熱き泉に湯浴みして

自然のうちにほとばしる、奇しき力を知らしめよ。

岩と岩との谷の陰、ふなとふなとの山の顔

緑の草の生い出でて、花咲く園となすまでは

溢れ出でつつ次のよも、耐えぬ泉とするや旅人」

これは藤村の詩です。藤村は岩清水と熱泉の両方に、非常に感じてうたった詩なのですが、別に福音的というわけではありませんけれども、

「幸は暑さに疲れ漕ぎ、渴き悲しむ人にあれ」

と、本当に渴き悲しみ、そして本当にそれを求めている人に幸いがあるようにと。藤村は多少、聖書に触れている人だから、多少におっている。

「幸は希望^{のぞみ}の薄くして、思い悩める人にあれ」

要するに、真清水であろうと、日本みたいに火山国で熱泉の湧くところにおいても、我々は温泉、熱泉と真清水において、やはり聖霊の姿を身に受けて、たとえば温泉に浸りながら、聖霊の事態を瞑想すれば、もう身体ばかりでない、魂まで生き生きとさせられます。

人生というのは、ただ聖書ばかりではないですよ。大自然の中に、また歴史の中に神さまの事態が、また言葉が溢れている。またその事態が溢れているから、それをどのような体験するかということは、キリストが自在におっしゃったように、また預言者がいろいろな具体的なものを捉えてそれを表現しているように、我々の魂もそうしたことに遭って、何処においてもキリストに出会う。キリストの栄光に、キリストの恩恵に出会う。そういう角度から受けとってゆくことです。

●デンマークの兵隊

デンマークとスウェーデンが19世紀に戦いまして、これは夏だった。ところが、デンマークの兵隊が傷を負った。血が流れると、非常に渴くそうですね。キリストも十字架の血潮で、非常に渴かれたことでしたけれども。そうして、見たら、白兵戦だから敵の兵隊がまたそこに倒れていた。これは自分より重症を負っている。そして、

「水を、水を！」

といって呻き苦しんでいる。そこで、デンマークの兵隊さんは可哀相になって、もう敵味方も忘れて、人間的なところへ来た。

「私の水筒に残っている水を飲ませよう」

と。そして這いながら行った。



「お前、飲め」

と、飲ませようとした。スウェーデンの兵隊がポケットからピストルを出して撃とうとする。ところが疲れて、引き金を引いたけれども、それだ。デンマークの兵隊が、

「お前、何をするんだ。私はお前に水をやろうと思ったのに、なぜ私を撃とうとするのか。お前が国のために戦おうとして、まだその意志があつたのは、それは俺は認める。だけど、水を与えようとしている私を撃ってしまったてどうするのか。

私はお前にやるよ、本当はこの水をお前に全部やろうと思つてたけれども、お前はこういうことをしたから半分にする」

それで自分が先に半分飲んで、その後、半分全部飲ませてあげたという話。血が流れて、本当に水に渴く。それは普通の渴きと違うですよ、深刻な死ぬか生きるかの渴きです。そのことを後方でもって部隊長が見ていた。しかし、スウェーデンの兵隊は飲んで、そこで倒れてそのまま死んでしまった。「ありがとう」という言葉を最後に。

「お前の行為は立派だ。お前みたいな兵隊がいるからデンマークは勝つたんだ」

と。本当の情け、敵をも愛する情け。最後は本当の人間性です。世界を救うものは本当の人間性、愛の心です。これだけが最後の勝利を決める、本当の意味の相手を救うものである。それで、このデンマークの兵隊の部隊長は王様に告げた。そうしたら、デンマークの王が最高勲章を彼に与えた。この精神を本当に買ったわけですよ。

「敵を愛せよ」

ということを身に沁みて思つていたわけですね。

水の渴きというが、私たちの魂は、実はこの負傷兵みたいに、健康そうな顔しているけれども、本当は一番大事なものに渴いていることをうっかりしている。それで他の物をもつて、活ける水の源でなくて、他のもので、文化文明で満たしている。

私は文化文明を否定しているのではないですよ。本当に文化文明をして文明たらしめるものは、正に福音の世界だから、それを抜きにして「文化の、文明の」と言つたつてダメだ。これは根っこのない大木が倒れてしまうように、20世紀の文明は倒れてしまう。何が恐ろしいといって、人間の心ほど恐ろしいものはない。水爆とか原爆より恐ろしいのは、それを使う人間の心です。それを捨てることのできない人間の心。どう考えても活ける水の源といわれている神を、宗教の世界を、本当の福音の世界を抜きにしては世界はダメになる。

そういうわけで、我々この福音を受けとった者は、本当に人の渴きを、デンマークの兵隊みたいに癒してやる。その水をもつて、活ける水をもつてやる。どこに持っているか。我々の魂の中に、我々自身が活ける水となる。我々自身が活泉となつて渴きを癒すことができます。どこにおいても、何時でもその機会はある。



●サマリヤの女となってキリストに水を戴く

キリストはサマリヤの女に、

「水をください」

と言って、

「実は、私がやる水はその水とは違うんだ」

と。キリストがサマリヤの女の素性をパツと言ったら、彼女はキリストを大預言者と思って、びっくりして水汲むことも忘れてしまつて、

「みんな来てごらん、この人を見よ。ここに本当の預言者がいる」

というわけです。あそこは非常にドラマティックなところです。こういう4章みたいなところに来て、私たちはサマリヤの女となつて、キリストにこの水を戴かないで、どんな水を飲もうとしているのか、というわけです。キリストというこの活泉を飲まなくては。

マルティン・ルッターが、

「一人びとりがキリストとなれ」

と、『クリスチャンの自由』の中で言っています。

「我を見よ」

とペテロが言いました。

「我がうちなるキリスト、このキリストと一如になつた。私は破れ器であるが、この破れ器の中にあるものが見えないか」

と、そういうことです。皆さんはそれだけの自信ならざる自信をはつきりと持たなかつたら、キリスト教ではない。遠慮も会釈もないですよ、そんな時は。活ける水が迸っている。自分の信仰なんていりませんよ。絶信の信です。己の信仰なんかに絶するから、上から本当の信が、キリストの信が入つて来る。キリストの人を活かす水が入ってくるから。

人間の魂は本ものによつかると思つて来るように出来てゐるんですよ。そうでなければ感じないようにできている。人間の魂は一人びとり、そんな素晴らしい魂を持っていて、感ぜざるを得ないものにぶつからないではもつたない話です。聖書の紙の奥から湧いてくる、魂の渴きを、全存在の渴きを癒してくれるところの水を飲まなくては。それから、魂に火が燃えたら、どんな嵐が来ても、風が吹いても、雨が降つても、消えない火が灯る。これがやっぱり聖霊なんだ。暗夜の嵐の中の灯台みたいな我です。

「汝らは世の光なり、われ汝のうちに在りて光なり。汝は活ける泉なり、我汝の中に在りて泉となる」

「はいー」

と言う以外に言いようがない。

「どうぞ成つてください。どうぞお入りください」

と。キリストは無条件に入ってくる。



「戸の外に立ちて我叩く。戸を開けてくれ。そうしたら入って、一緒に御馳走を食べるよ、聖霊の御馳走を」
と。そういう永遠の生命です。

●患難を通って天国に

黙示録の7章9節、

「9この後われ見しに、視よ、もろもろの国・族・民・国語の中より、誰も数えつくすこと能わぬ大なる群衆、白き衣を纏いて手に棕櫚の葉をもち、御座と羔羊との前に立ち、
贖われた姿が白き衣、勝利の姿が棕櫚の葉です。」

10 大声に呼ばわりて言う『救は御座に坐したもう我らの神と羔羊とにこそ在れ』¹¹ 御使みな御座および長老たちと四つの活物との周囲に立ちて、御座の前に平伏し神を拝して言う、¹² 『アアメン、讚美・栄光・知恵・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン』¹³ 長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』

¹⁴ 我いう『わが主よ、なんじ知れり』（黙示録7・9～14）

「わが主よ、なんじ知り給う」

と。私は今度の『活かすキリスト』の裏表紙に、「アナテマ魂」「アナテマ・ガイスト」（ANATHEMA || GEIST）〔独和対照〕を書いた。あそこに佐久間象山の詩を引用しました。

「天公本知我」（天公もとより我を知る）

と。パウロがロマ書13章で、

「知られたる如く我知らん」

という言葉がある。神は本より我を知る。汝知り給う。神さまが知っているというのは、私が知っているよりも、我々が知っているよりも、もっと深く知っていらつしやる。

「汝知り給う」

ということとは、非常に信頼深い言葉なんです。もう人がどう言おうが、どう思うが構わない。他人の知るを求めず、あなたは知っている。あるいは、汝見給う。見るということ、知るということは同じなんだ、神さまの方は。「汝見給う」というのは、内側のことだからね。或いは「汝聴き給う」でもいい。我が発せざる言葉を汝は既に聴いておられる。詩篇139篇がその角度の詩篇です。

「かれ言う『かれらは大なる患難より出できたり、

けれども、この曲がった世の中で、何等かの意味で患難を通らなかつたら天国に往けないです。患難を通して歓喜の世界へ。大悲劇を持ったベートーヴェンも、ダンテも、

「人生は喜劇だ」



という。そういった苦しみの中にありながらもほほ笑んでいるような魂。女の人が苦難を荷って、そして本当に苦しい顔もつぶやきもしないで微笑んでいるような、これはもう神品です。天的な姿です。

そういうことで、我々は何等かの意味において患難を通して天国に往く。

「十字架を負いて我に従え」

という。辛い事に会ったら、いよいよこれはキリストの弟子になったと思わなくては。「何をか！」と。

羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。』(黙示録7・14)

羔羊の血でもって洗ったら白くなった。これは贖罪の血だから、罪を贖ったこのキリストの血によって、白き天衣を戴いた。身体が天的に白く光るわけだ。変貌の山でキリストは白く輝いたでしょ、まぶしくて見えなかった。

みんな誰でも涙をもっている。天界にも涙がある。うれし泣きの涙、感激の涙のない、そういう世界は困ったものだ。悲しみの涙は無くなるけれども、感激の喜びの涙が天界にはある。もう天界の現実が見えるようです。

藤井先生という私の先生は、私が大学に入って最初の日曜日、黙示録の22章のところ、そこを教わった。

〔註…1925年3月29日(日)(高校3年の春)の小池辰雄日記に次のような記述がある。〕

「雨。午前8時起床。8時半出掛けた。市ヶ谷駅から省線で渋谷へ。渋谷から玉川電車で駒沢新町へ、下車。藤井先生のお宅のお集まりに列した。僕は初めてである。僕の上ったときは9時半で誰も来て居られなかった。40分ほどして女の方が一人来られた。高島の伯母様に似て居られるので、ハッと思っただけだった。そして伯母様を思った。……10時半から朝のお集まりは始まった。讃美歌35を讃美した。先生の切なる、愛なる、憂国なる祈りがささげられた。聖書黙示録21章の朗読あり。讃美歌215を歌った。黙示録21章に関するお話あり。その真意の幾分をか察し得て有難く、大なる希望に満ちた。エルサレムの聖なる都！その宝石！讃美歌189「その門は終日とじず、此に夜あることなし」たえなるめぐみや、を歌って祈り、礼拝は終った。先生は僕の健康をよろこんで下さった。信仰へ！信仰へ。……」

また、著作集第6巻『随想集』(第二部「偉大な野人」／三「藤井武先生と私」／(其二)「天職論」)の記述には、

「翌1926年の春、大学入学の際、喜んで下さった先生の顔を、否その心を忘れ得ない。多分その祝いの意味をもこめてであろう、3月7日、雪の降った日曜の朝、『聖書の結婚観』を御恵下さった。この日曜から先生の地上を去られる日までの日曜は、凡そ集会のある限り殆どすべてを新町で暮らした。」

そして、先生が亡くなられる2週間前、6月30日(1930年)、それが最後の集会だった。それが黙示録の22章だった。黙示録の22章というのは、私に藤井先生とのお交わりで始めにして終りだ。5年間、1回も休まないよ、私は。藤井先生は私にとってそういう不思議な、特別な先生でした。



「凡ての涙を拭い給うべし、生命の水の泉にみちびいてくださる」

もうここを読んだだけで、何か水を飲んだような気がしませんか。

「水は H_2O である」

なんて解ったつてどうにもならない。飲まなくては。何だつてそうですよ。聖書の表づらの意味が分つてどうなるんですか。ご苦労さまと言いたい。表づらの意味なんかどうだつていい。食べてください。意味を解釈するよりか遙かに深い世界に入つて往かなくてはね。そういうのが黙示録の7章12節です。

●キリストは究極の無者

それから21章3節、

「³また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、^い暈みかけて言つてゐる。神と人とが一つになつてしまつて、一如の世界だ。』

⁴かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、^{かなしみ}悲歎も号叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり」⁵かくて御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』^{あらた}

キリストを受けとると、日々これ新たですよ、古びない新たさ、質的にいつも新しい。

また言いたもう『書き記せ、これらの言は信すべきなり、^{まじ}真なり』^{はじ}また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、^{おわり}始なり、終なり、^く渴く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。』(黙示録21・3)

と。同じことが書いてある。無条件に与えてくださる。キリストは有るがままに向かつてくる者には、

「お前はそれでも」

なんていうことは絶対におつしやらない。十字架上の悪盗賊の一人が、

「私はさんざん悪いことをしましたが、せめても覚えてください」と言つたら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

とおつしやつたではないですか。誰がこんなことを言うか。十字架上のキリストですよ。もう血が流れて渴き切つてゐるようなキリストが、「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」と、何という驚くべき勝利者の言葉ですか。もう神の靈に、生命に入っていないければ、そんな言葉は出てこない。キリストは100%の人ですから。徹底的に自分を無にしているから、究極の無がキリストなんです。キリストが究極の無者なんです。だから、私が著作集第一巻「1975年刊」で、



『無者キリスト』

と書いたんです。私がこの一卷を書いた時、「もう死んでもいい」と思った。キリストを告白したんだから、もうこれ以上のものは無いんだ。

一番大事なクライマックスのところに、「生命の水の泉」という言葉がたたみかけて2か所も出てる。どんなにキリストは永遠の生命を私たちに与えたくてしようがないか。どうせみんな死ぬんです、相対的には。しかし、いわゆる相対的生死を乗り越えた、このキリストの生命を戴いている者は本当にその世界をじつくりと自分の中に持つて往くことです。「何をか!」というものがなくてはダメですよ。いわゆる頑張っているんじゃない。

「何をか! どうなったっていいよ、お前は本当に勝利者になった」

とキリストが言ってくくださる。それだけの相対的判断を乗り越えた、本当の勝利者です。誤解されつ放しでいい、人にわからない放しでいい。汝知り給う、キリストは。

「我、汝を知る」

ということとは、本当に投げ棄てた私を知ってください。というのは、キリストが私を投げ棄てて下さったから、全部恩寵なんだ。絶対恩寵の世界です、十字架も聖霊も復活の生命も。「悟り」とか何とかそんなじゃない。

それを本当に受けとつて突つ走ったのはパウロです。何といっても使徒たちの中の第一人者です。ということは、パウロが偉かったのでも何でも無い。本当に彼はキリストを受けとった。

「生命の水、活ける水の源」ということ。私たちの渇きというのはどういうことですか。渇きを癒して戴く、水を戴くその管は祈り^{くだ}なんです。祈りの世界で自分を本当にキリストという温泉の中に、キリストという谷川の中に投げ入れること、これが祈りなんです。聖書の現実を、黙示録であろうと、エレミヤであろうと、ヨハネ伝であろうと、何であろうと、これを今、現に、現実にしなかつたらつまらないです。

今は終末的現在です。それをいつも現在にしているのは、祈りの世界で本当に源泉に自分を投げ入れること。自分が今度は源泉的に吹き出るような人になってください。日常生活の祈りの中でやってくださいよ。

残れる水筒の水が源泉になるんです、今度は。あのデンマークの兵隊さんはそのような気持で分けてやった。スウェーデンの兵隊は、そこで倒れたけれども、彼は本当にその敵の愛によって魂は救われたようなもんだ。殺そうとした奴を助けてやった。

それで私たちは、深く源泉に自分を浸し、熱泉に自分を浸す。その中に入ってください。キリストはどういう人であつたかという、祈りの人であつた。これが一番の答えです。祈りの人であつたが故に、本当に神さまを受けとつたがゆえに、愛の人であつた。この活ける水は温泉ともなり、真清水ともなつて隣人を助けるわけだ。愛の泉となつて愛泉となつて流れる。終ります。

